石田縞

石田縞は、文政年中（1818年～1829年）に現在の鯖江市立待地区で高島善左衛門が貧しい村人を救うため、美濃で縞織物を習い、職工を招いて工場を建て、近在に広がった。明治後期から大正にかけて福井県下の女学校や小学校の制服に指定され、最盛期を迎えた。昭和になると石田縞にかわる織物の生産が増えたため、一度は生産が途絶えたが、後に復元され、現在に続いている。

（協）鯖江市繊維協会

916-0004
鯖江市糺町32-1-1

TEL
0778-52-1880

【主な製品】名刺入、ティッシュカバー、マフラー

昭和47年、吉川道江氏、山本かよ子氏が、立待小学校創立百周年記念イベントで復元した石田縞を披露し、大きな反響を呼んだ。石田縞は縦縞模様が特徴であり、経糸に細い2本の木綿糸を撚り合わせた双糸を使っていることから双糸木綿とも言われた。昔は藍染めが主流であったが、現在は地元で採取したさくら、玉ねぎ、よもぎなどを使っており、色とりどりの小物などを製作している。

佐々木　理恵

916-0024
鯖江市長泉寺町1-6-15

TEL
0778-51-4647

【主な製品】越前石田縞着尺、越前石田縞帯

一度はすたれてしまった石田縞をもとに、福井の特色ある織物を作りたいという思いから、平成元年に「越前石田縞」として発表した。佐々木氏が手掛ける越前石田縞の特徴は、竹紙（ちくし）の糸を使うこと。竹紙の糸は、今立にある和紙業者に漉いてもらった竹紙を細くカットし、撚り合わせて糸にするものであり、非常に手間暇がかかっている。製織の際、経糸としては負荷が大きいことから、これまでは竹紙の糸は主に緯糸として使っていたが、最近は経糸に用いたものにも取り組んでいる。